

Title	カント教育思想研究序説(その一) : "Idee"と"philosophieren"
Sub Title	A study of Kant's educational thought : on his concepts of "Idee" "philosophieren"
Author	俵木, 浩太郎(Tawaragi, Kotaro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1974
Jtitle	哲學 No.62 (1974. 3) ,p.331- 354
JaLC DOI	
Abstract	Through an examination of several key concepts within Kant's philosophical system, this paper outlines some of the implications which his philosophy holds for educational thought. In the first section we try to show that the reasoning behind his approach to philosophy can best be understood in terms of the three questions which he poses in Critique of Pure Reason and the four questions which are set forth in Logic. To the first set of questions he applies the term 'scholastic conception' (Schulbegriff), and to the second he applies the concept of 'cosmic conception' (Weltbegriff). He concludes that philosophy, if conceived in terms of the framework, exists only in the realm of 'idea'. The second section focuses on the meaning of the word 'idea' (Idee) as an essential concept in Kant's system of philosophy. For Kant an idea comes to have existence and meaning as a belief of an individual and becomes something which the individual expects can be realized universally through knowledge or science. Here the force which drives mankind toward realization of 'idea' is man's consistent effort to be guided by 'practical reason' which Kant emphasizes. Among Kant's various expressions of consistent or moral effort the concept of 'philosophize' (philosophieren), is singled out for discussion in the third section. The word philosophy originally meant, a love for knowledge. Kant has confidence that it is possible and meaningful to exhort others to love knowledge. It is suggested that this confidence is also the foundation for his interest in education. The three maxims which appear in Critique of Judgement, Anthropology and Logic can be interpreted as his explanation of the concept of 'philosophize', and in them, we find significance from the standpoint of education.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000062-0331

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カント教育思想研究序説（その一）

“Idee” と “philosophieren”

俵 木 浩太郎

はじめに

第1章 カントの問い

第2章 理念 (Idee) の位置

第3章 哲学すること (philosophieren) について

は じ め に

私達がここに試みる論述は、イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724~1804) の教育思想をあきらかにしようとするものである。

彼、カントについてはすでに多くが語られたし、今後も語られつづけるであろう。そして今、私達も彼について語ろうとしている。人も知るとおり、彼は教育学が大学の講壇に誕生するにあたってその産褥に立会ったひとりであった。しかし私達が彼の教育思想を探ろうとする関心は、そうした学史的事実にもみ向けられたものではない。

彼は“もし人類を導いてその最良最善の状態に至らしめる手段を手中にしていないならば、哲学は何の役に立つであろうか”という。こういう言い方はかならずしもカントにかぎられるものではなく、他の多くの人びとによってもなされたであろう。しかしながら、人をしてよりよくあらしめたい、ということが教育というものにともなう願いであるとするならば、カントの哲学そのものが全体として教育とかかわらざるをえない、ということはこの述懐は示しているであろう。

じつに、彼のえがく理想的原型としての哲学者は、同時に理想としての

教師でもあった。このことはすでに彼にあって、教育と哲学が理念においてむすびつくもの、反面、現実には一致していないもの、と考えられていたことを示す。そして、こんにちの私達はといえば、その後におきたそれぞれの専門化の結果、教育と哲学がわかちがたくとり扱われていたこともあった、ということを思い起こすだけでも多少の意味がありそうに思える時代に生きている。

以上のような立場から私達がカントの教育思想を語ろうとすることは、カント哲学そのものを論ずることにならざるをえない。かつまた、その仕事はカント哲学を分析的にとり扱かうことによってははたされえないであろう。したがってこの論述は未熟な素描にすぎないものではあるが、その素描の地平のみはかかる意味合での教育にふさわしいものでありたい、と願うものである。

第1章 カントの問い

“人間は教育によってだけ人間になることができる⁽¹⁾”という言葉はカントの教育思想を語るときにしばしば引用される。たしかにこの言葉は私達が日常生活で“あいつは教育のない人でなしだ”などと、他人を悪く言うときの文脈と似ているために、常識的にも理解しやすいように思われる。しかし同時に常識では“あの人は教育もないのに立派な人だ”という言い方も許される。こういうふたとおりの言い方が許されるのであれば、人間が人間になることを教育によって、と限定したカントの意図は常識の範囲では、はっきりしなくなる。また“教育だけがすべてじゃないよ。人間はなんといっても〇〇が大切だよ”と〇〇のところへ、そう言う人が多かれ少なかれ教育と対立すると考えているもの、——たとえば“生まれ”であってみたり、“経験”であってみたりするのだが、——があてはめられて使用されることもある。これらの言い方はそれぞれ使う人の日常的な生活実感

にささえられているために、時とすると、きわめて感動的にさえひびくことがある。このように、教育とか、人間とかいう言葉は日常的にはきわめて多義的に使用され、それはそれとして、人と人との間になんらかのコミュニケーションを成り立たせていることも事実である。そこで教育思想、というより教育について考えること一般が、そのような多義性をのりこえようとする努力をいやおうなしに含んでいるといえよう。

それでは“人間は教育によってだけ人間になることができる”とカントが言ったとすれば、“人間”といい、“教育”という大きな言葉を彼はどのように意味限定するのであろうか。私達はこの問いにこたえることによって、カントの教育思想を理解しうることを期待するのである。

さて、このふたつの言葉の関係を示した文は“教育は人間を人間にするものである”ということをも意味している。だとすれば、人間が人間になるとはどういうことだろうか、ということがこたえられればおのずと教育もあきらかになる、と考えてもよいであろう。そしてじつにこの問いこそが、カントが生涯の思索をもってこたえようとした当のものなのである。カントは『純粹理性批判』(Kritik der reinen Vernunft, 1781)において、“理性の一切の関心(思弁的および実践的関心)⁽²⁾”を次の三問にまとめる。

1. 私は何を知りうるか
2. 私は何をなすべきか
3. 私は何を望むことが許されるか

さらに『論理学』(Logik, 1800)では、

4. 人間とは何か

を加え、次のように説明する。

“第一の問いには形而上学が、第二の問いには道徳が、第三の問いには宗教が、そして第四の問いには人間学が答える。しかし根本的にはわれわれは、これらすべてを人間学に数え入れることができるだろう。それは最

初のみっつの問いは最後の問いに関係しているからである⁽³⁾”。

私達はここで『純粋理性批判』の三問と『論理学』の四問の持つ意味を明らかにしなければならない。これはカントを理解する上でのひとつの重要な点であり、多くの人びとが論及している点でもある。しかし私達は次のように考えることが、カントの本意にもっとも近いのではないかと思うのである。

彼の規定するところによれば批判は形而上学に先だつ準備的練習、ないし予備学である。理性批判のなすべきことは、認識し、実践し、欲求する主体としての理性、その理性という概念を判明すること、すなわち三問に答えることなのである。したがってそのみっつの疑問文の主語は“私”であらざるをえない。ところで第四問の主語は“人間”である。これはあきらかにレベルの異なる問いである。三段論法をもってすれば“私は人間である”“私は私を知っている（理性批判によって）”だからといってその帰結として“私は人間を知っている”とは言いえないであろう。理性批判が個的自己認識の試みであるとすれば、第四問には類的自己認識としての答が必要とされるといえよう。それとともに『論理学』における最初の三問が、『純粋理性批判』と同じく、私を主語としながらも、予備学としての批判に立脚してはじめて可能になる、形而上学、道徳、宗教によって答えられるべきものとされることにより、第四問とレベルをともしていることも首肯しうるのである。この『純粋理性批判』における三問形式と『論理学』の四問形式におけるレベルの違いは、彼が哲学を学的概念（Schulbegriff）と世界概念（Wertbegriff）という二種の概念をもちいて考察していることに照応する。

この Schulbegriff と Wertbegriff の対比もまたカントを語る人の多くが言及してきた点である。Welt は訳語としては世界または世間のどちらかがあてられるのに対し、Schul は学的、学術的、学校、比喩的には講壇用などと訳されているが、かならずしも意味するところがあきらかである

とはいいがたい。カントのこの語の用法に即していえば、これらの訳語のほかにも学派、学者的、場合によってはスコラ的といった語の余韻をじゅうぶん考慮に入れているように思えるのである。この論述においては訳語の適否の詮索はわきに置くにせよ、次の注意を加える必要はあろう。すなわち、日本語の学という語は Schul と同時に Wissenschaft をも意味しうることである。そしてこの Wissenschaft はカントにおいては理念と結びつけて使用されることのきわめて多い語でもある。したがって私達は学という語において、Schul と Wissenschaft の関係または差異を読みとるうえで慎重でなければならないと考えるのである。

Schulbegriff としての哲学は "Wissenschaft としてのみ求められ、わずかに哲学的知識の体系的統一を、したがってまた認識の論理的完全性を目的とするような認識体系の概念にほかならない⁽⁴⁾"。

Weltbegriff としての哲学は "一切の認識と人間性の本質的目的との関係についての Wissenschaft である⁽⁴⁾"。

カントは哲学という Wissenschaft が Schulbegriff としても、Weltbegriff としても考えられるというのである。しかしながら Weltbegriff としての哲学は "可能な Wissenschaft という単なる理念にすぎないのであって、決して具体的に存在するものではない⁽⁴⁾"。

このような意味においては彼の批判という業績も学的概念に属するものといわなければならない。したがって人間とは何かという問いにたいしては私達が現実を持ちあわせている学的概念の哲学ではなく、彼の言う世界概念としての哲学、理念としての哲学、そして『論理学』においてかの四問によってその分野が示されると言われた"世界市民的意味における哲学"が最終的な解答を与えるべきもの、と考えられるのである。このように解すると私達はこう言ってもよいようである。理念としての哲学、世界概念としての哲学はそのなかに個別的な人間学を含みながらも、同時に全体として人間学ともいいうるようなものである、と。

ところでカントは『実用的見地における人間学』(Anthropologie in pragmatischer Hinsicht abgefasst, 1798) という著作を発表している。この書は理念としての人間学とどう関連づけられるのであろうか。

“このような人間学(実用的意図における——筆者)は Schule にひきつづく Weltkenntnis とみなされるかぎり〔中略〕これが世界市民としての人類の認識をふくんでいてはじめて実用的といわれる⁽⁵⁾”。

ここに実用的 pragmatisch という語は physiologisch と entweder oder の関係におかれている。この二分法はカントの体系の基本である自然と自由もしくは道德の二分法を反映したものであることは言うまでもない。彼はこの Weltkenntnis を目的とした人間学を、やはり同じ目的をもつ自然地理学(physische Geographie)と並置し純粹哲学のうちに入れる。ここに Weltkenntnis とはなにか、が問題となる。この文章の訳例では Schule を文字どおり学校ととり、学校を卒業して世界または世間に出たから得られるべき通俗的な世間知であると解するものもある。しかし私達はすでに Begriff が Schul と Welt として考察されていることを見たのであるから、ここにおいても、Kenntnis についての Schul と Welt の対比と読むことも可能ではないか、と考えるのである。Schul と Weltkenntnis はともにゲシュペルトで書かれていることは、カントが特に対比を意図したと考えてよいであろう。そしてその対比は事物としての学校と世間での知識を受講者の人生における時間的継起としてとり出している。と解されるものの、一方では学校でえられる知識すなわち Schulkenntnis を、Weltkenntnis に対比させることを含みとしてもっている、と考えてもよいのではなかろうか。

このような考え方からすれば Kenntnis の段階における理念への指向が Welt と言われる、と解しうるのである。そしてカントは認識一般を段階的に考えていたのであり、そこでは Begriff は Kenntnis よりも高い段階におかれていることを考えると、Weltkenntnis としての人間学が Sch-

ulbegriff としての哲学の一部を構成する、と考えてもよいであろう。

“人間とは何か” という問いにこたえるべき理念としての人間学との対比でいえば、この『実用的見地における人間学』はきわめて限定された範囲のもの、——とは言え理性はそのようにしか使用されないのであるが、——といわざるをえない。その範囲での彼の答は次のとおりである。

“ある存在者の類についてその性格を示すためには次のことが必要である。すなわちその存在者をわれわれに知られている他の存在者とともにひとつの概念のもとに包括し、ついで、それらの存在者が相互に区別されるものを特性として、区別の根拠のために示し、使用することである。ところがわれわれの知っている一種の存在者（A）をわれわれの知らない他種の存在者（非A）と比較する場合には、比較の媒概念がわれわれに欠けているのだから、どうすれば前者の性格を示すことを期待したり、要求したりすることができるであろうか、——最高の類概念が地上の理性的存在者のそれであるとしても、われわれはこの存在者のいかなる性格をも述べることはできないであろう。なぜならわれわれは地上的でない理性的存在者については、その特性を示し、かの地上の理性的存在者を、理性的存在者一般のもとにおいて性格づけるための、何の知識ももっていないからである。——だから人類の性格を示すという問題は、まったく解決不能のように思われる。というのも解決は二種の理性的存在者を経験によって比較することによって行なわれなければならないが、この経験を地上的でない理性的存在者はわれわれに提供してくれないからである。

かくて生物的自然の体系において人間の部類を示し、これを性格づけるために残っていることがらは、人間が自身で設定した目的にしたがって自己を完成する能力をもったものであるから、彼は自らを形成する性格をもつものだ、ということだけである。このことによって、理性能力を賦与された動物（animal rationabile）である人間は、自己自身を理性的動物（animal rationale）たらしめうるのである^{(6)''}。

私達はこの答を見ることによって、なぜ彼が“人間とは何か”の真の答を理念としての人間学に託したか、を知ることができよう。人間が自身で設定した目的に従って自己を完成する能力、すなわち理性をもったもの、理性的存在者である、ということまでは経験的に主張することができる。しかしながら、この範囲では人間という言葉を経験的存在者におきかえたにすぎず、理性のなんであるかはいまだあきらかではない。その故に哲学の予備学として、理性批判がその任にあたることになるのである。カントは三問形式のそれぞれの問いについて、理論理性の批判によって第一問に、実践理性の批判によって第二問に、そしてその両者の総合が第三問に対応することを意図し、そのような理性批判の土台の上にのみ形而上学が可能になる、と構想した。そしてさらにこの形而上学は“世界市民的意味における哲学”すなわち理念としての哲学においては四問形式における第一問“私は何を知りうるか”にこたえるべきものとされているのである。

さてこれまでで私達は“人間とは何か”にさきだって理性とは何かが問われなければならないことを知り、かつそれによって、経験的に言われうる人間の自己形成性なるものの目的が“私は何を望むことが許されるか”の解答として示されると期待してよいことを知った。そしてこの解答は、私達がこれまで問題にしてきた“理念としての学”という言い方がなぜ可能であり、必然であるかを同時にあきらかにするものなのである。

第2章 理念 (Idee) の位置

カント哲学における“理念” (Idee) のすべてを語ることは、カントが語ったすべてのことをくりかえしたにせよ、やはり不可能というべきであろう。理念こそカント学の奥儀、秘伝とも言うべく、いわく言い難いものである。このようなささやかな論述においてカントの理念そのものを論ずることはもとより不可能である。しかしカントの教育思想を語るにあたっ

て、理念にふれないわけにはいかない。したがってここにおいて理念が言及されるのは行論上やむをえざる範囲、すなわちいかにそれがいわく言い難いものであり、にもかかわらずカントの体系の中心的部分であり、そのようなものとして教育にかかわりをもたざるをえない、ということを述べようとする範囲においてなのである。

それでは、なぜ私達はカントの理念という言葉を重ねて考えねばならないのか、それを説明することからはじめよう。

ある人は近世哲学の流れを『純粋理性批判』と『実践理性批判』の対立として見る事が可能なことを示唆する。前者によって Sein を、後者によって Sollen を示す、とすれば、Sein と Sollen が一致しないかぎりそういう言い方もできるであろう。しかしながら、私達がこの論述をはじめるにあたって意図したカントについての総合判断——すなわち、カントのなかからカントのそとへ出たところに成り立つ判断、という意味からすれば、私達の関心の焦点は、

“われわれが純粋理性についてなすところのすべての歩みは、精細な思弁をまったく顧慮しない実践的範囲においてさえ、あたかも一步一步が慎重な先見をもってこの証明を与えるためにのみ考え尽されたかのように、厳密にしかもおのずから理論理性批判のすべての要素に一致する⁽¹⁾、”
 というこの“一致への驚愕”においてほかにはない。私達はこの一致をこそ強調すべきことと考えた彼の意図を、両者の序文において知ることができる。

『純粋理性批判』

“純粋理性のもっとも些細な要素からはじめて、順次にその全体に達し、今度は逆に全体からはじめて個々の部分にいたるという、二通りの進行から生じた結果が相等しい⁽²⁾。”

『実践理性批判』

“実践理性批判においては、われわれは原則からはじめて概念にいたり、

また概念から——できるならば——感官に進むことになるのだが、これに反して理論理性においてはわれわれは感官からはじめて原則に終らなければならなかった⁽³⁾”。

ここでふたとおりに表現されている思索における往復——カントは文字どおり Ausgang と Rückgang といい⁽⁴⁾、別の個所でもちいる Herablassung (下降), Erhebung (上昇)⁽⁵⁾ という表現とともに彼の特長的方法ともいふべきものであるが——の一致によって彼は自説の正当性を主張する根拠 (Evidenz) をえる。したがって両著は彼の方法論によって、メダルを表と裏の役割をになわされたものであり、彼の課題はメダルそのものをいかに表現するかにあった、と言ってよいであろう。

『純粋理性批判』における上昇は、感性から悟性、悟性から理性へとすすむ。この過程は認識の表象についていえば、直観、悟性概念、理性概念である。そして悟性概念から生じて経験の可能を超出するような概念は理性概念であり、これにたいして理念 (Idee) という名がプラトンを想起しつつ与えられる。

ところで彼はすでに判断の形式から経験におけるいっさいの悟性使用を指導するところの純粹概念——カテゴリーをひき出しているのであるが、理性推理の形式をカテゴリーにならって直観の綜合的統一に適用することにより、純粹理性概念すなわち先驗的理念をえる。この先驗的理念は、

1. 思惟する主観の絶対的統一
(心理学) 私 靈魂 不死
2. 現象の条件の系列の絶対的統一
(宇宙論) 世界 自由
3. 思惟一般の一切の対象の条件の絶対的統一
(神学) 神

といわれる。

彼は、この先驗的理念は理性の思弁的使用においては、経験的認識にお

ける多様なものに体系的統一をあたえる統整的原理にすぎないことを、先験的弁証論において証明した。そして先験的仮象、すなわち思惟の主観的条件にすぎないものが客観的条件と見なされるところから生ずる仮象（このことは理性そのものに自然的な根拠をもっているのであるが）、を理性の正しい思弁的使用から排除した。これこそ彼が理性にたいする消極的制限を付しえたとして、批判哲学の功績を自負する点である。

ところで“積極的認識の源泉もどこかに存せねばならぬはずである⁽⁶⁾。”

思弁的理性使用に制限が設けられた以上、その課題は理性の実践的使用において探求されなければならない。ここに実践的というのは自由によって可能になるすべてをいう。さきに見たところでは、先験的意味での自由は現象を説明するさいの経験的な前提とはされえないものであった。ところが実践的意味では、

“理性の指示する動因によってのみ規定せられる意志は自由意志と呼ばれる。そしてかかる自由意志に結びつく一切のものは、それが理由であると帰結であるとを問わず、すべて実践的と言われる。そしてかかる実践的自由は経験によってのみ証示される⁽⁷⁾。”

そしてこの意志は感官を直接触発するものによって規定されるだけではなく、理性によっても規定される。この意志にたいする理性の規定が命法(Imperativ)、自由の法則、実践的法則と呼ばれるものを必然ならしめるのである。

第一問“私は何を知りうるか”が消極的制限としての解答を与えられたのにつづいて、第二問“私は何をなすべきか”が実践的法則“幸福をうけるに値いするように行為せよ⁽⁸⁾”によって答えられる。ここに幸福とは人のいっさいの傾向(Neigung)を満足させることであり、この法則は“傾向を満足させる自然的手段を無視して、ひたすら理性的存在者一般の自由と、この自由と幸福にあずかることとを原理的に合致させるための必然的条件とを考察するもの⁽⁹⁾”である。

かくて第三問“私は何を望むことが許されるか”は“もし私が幸福に値するように身を処するならば、どうして私はかかる行状によって幸福にあずかり得るという希望をもつことが許されるか⁽¹⁰⁾”という問いにおきかえられる。この問いが肯定的に答えられるためには、自己を幸福に値するものたらしめる不断努力と、幸福でありたいという希望とが結合されなければならない。このような結合は道徳的法則に従って命令するところの最高の理性が、同時に自然原因として根拠におかれるときにのみ希望することが許される。これが第三問にたいする答となる。

この最高の理性——英知者——という理念は世界におけるいっさいの幸福の原因をなしており、さらにそれが幸福に値せんとする努力と厳密に対応するかぎり、この理念は“最高善の理想⁽¹¹⁾”と名づけられる。

私達はカントの理性の探求の跡をおって、理論理性の理念がたんに統整的原理であってそれ自体客観的実在性を持つものではないことを知り、しかしながら理性の実践的使用の道によっていまや最高善という頂点に達することをえた。私達は彼がここをもって頂点とするからこそ、理念という言葉を重ねて考えざるをえないのである。

ところでこの理念なるものは、どこにどう存在するものなのだろうか。個人の信 (Glauben) において、というのがカントの答えとなるであろう。彼の信の説明は意見 (Fürwahrhalten) からはじめられる。意見すなわち何かあることを真と思うことは、その根拠が判断する主観にしかない自信 (Überzeugung) と、客観的に十分な根拠をもつ確信 (Überredung) とにわかたれる。その基準は

“外的にはその意見を他者に通じさせることができ、またそれがすべての人々の理性に妥当するものとして認められ得る、ということである⁽¹²⁾”。

確信はその主観的妥当性におうじて、臆見 (Meinen)、信 (Glauben)、知 (Wissen) の三段階を有する。ここに信とは主観的にだけ十分であり、客観的には不十分と見なされる意見である。その信と理念の関係について

は次のように言われる。

“信という語は理念が私に与える指導と、私の理性活動の促進を助ける主観的影響にだけしか関係しないのである。そして私は、思弁的見地からは理念について弁明しえないにせよ、理念のかかる指導の故に、私は理念を固持せざるをえないのである⁽¹³⁾”。

かくして信は主観的には十分、客観的には不十分なものの人格的综合であり、理念は道徳的确实性の主観的根拠（道徳的心意）をなすものであることが知られる。

理念と信の関係がこのようなものであるから、感覚界と実践的理念の関係は、感覚界において理性的存在者達の自由意志と道徳的法則とが完全な体系的統一をなすかぎり、“秘儀集団 (corpus mysticum)⁽¹⁴⁾”にもたとえられるようなものでもある。私達がさきに奥儀秘伝といったゆえんもまたここにある。

かくして私達は頂点からの下降において、彼が付した次のような制限の妥当性を理解しうるのである。

“しかし実践理性がかかる頂点に達したからといって、実践理性があたかもこの概念を適用するためのいっさいの経験的条件を超越して、新奇な対象を直接に認識しうるように思いなし、ためにこの概念から出発して道徳的法則そのものにかかる概念から導来することは許されない⁽¹⁵⁾”。

そうではなくて道徳的法則が最高善という理念を前提とすることを必然ならしめるのであって、人は“道徳的法則を与える理性の導き⁽¹⁶⁾”にこそ従わねばならないのである。

“この理念〔最高善をさす——筆者〕を実践的に、すなわちわれわれの合理的行為の格率にたいして、十分に規定するのは、知恵の教え (Weisheitslehre) である。そうしてこの教えはまた学 (Wissenschaft) としてはすなわち古代人が解した意味における哲学 (Philosophie) である。古代人にあっては、哲学とは、最高善とはどこにあるかという概念と、いかに

してこれを獲得すべきかという態度とを教示するようなものであった。理性が最高善を学たらしめようとするかぎり、哲学を最高善の教えと見るこのことばの古い意味を保存しておくのはよいことであろう⁽¹⁷⁾。

ここにいう知恵の教え、最高善の教えとしての哲学も最高善が理念であるかぎり当然、可能な学という単なる理念であって具体的には存在しない。しかし人はその理念の故に努力するのである。彼は言う。

“われわれは感性という雑草におおわれている 唯一の真正な小径が発見され、これまで何度となく試みてはその度毎に失敗した模型を、人間に許されうるかぎり原型〔としての哲学、理念としての哲学——筆者〕に等しくすることに成功するまでは、さまざまな道をへてかかる哲学に近づこうとひたすら努力するのである。それまでわれわれは哲学というものを学ぶことができない。実際——哲学はどこにあるのか、誰がそれを所有しているのか、またわれわれは何によってそれが哲学であることを識るのか。われわれはしょせん、哲学する (philosophieren) ことを学びうるだけである⁽¹⁸⁾”。

私達は最高善という理念が幸福に値せんとする不断的努力によってはじめて前提されうるものであることを知った。ここにおいて最高善から派生した知恵の教えとしての哲学もまた、哲学する、という実践的努力に対応する理念であることが示されたのである。

第3章 哲学すること (philosophieren) について

“哲学する” とはとくにカントの言葉として、わが国でも人口に膾炙してすでに久しい。また彼の伝記筆者が伝えるように、彼は学生に“哲学することを学べ” と呼びかけたことも知られている。したがって私達の教育的関心から、教師カントのこのアピールの意味をあきらかにすることなくしては、カントの教育思想を語ったことにはならないであろう。

哲学, Philosophie の語源, カントのいう“古代人の解した意味”においては, その動詞形 philosophieren は“知を愛すること”にほかならない。こういってしまうと, きわめて一般的, 抽象的でたんに知性尊重または主知主義の主張というほどの意味にしか解されない, というそしりをうけるかも知れない。わが国における訳例が“哲学する”とか“哲学的に思索する”とかいうのも, philosophieren のカント固有の意味を移そうとする配慮であるかも知れない。しかしながら philosophieren を知を愛する, と言いかえた場合, それが一般的, 抽象的であるにもせよ, その一般性, 抽象性においてもカント固有の主張がとり出されるのではないか, という点から検討を試みよう。

彼は『実践理性批判』において Philosophie を “Liebe zur Weisheit” であり同時に “Liebe zur Wissenschaft” であるものと説明している⁽¹⁾。Weisheit と Wissenschaft についてカントがどう考えたかはすでに述べたところから知られるであろうから, ここに吟味を必要とするのは, 彼が学びうると考えた“愛する”ということである。

“神にたいする愛は, 傾向性 (感覚的愛) としては不可能である。神は感官の対象ではないからである。人間に対する愛は, なるほど可能であるが, しかし命ぜられることはできない。したがってあらゆる法則の核心において理解されるところのものは, 実践的愛 (practische Liebe) のみである。この意味において神を愛するということは神の命令を喜んで (gern) 実行すること, また隣人を愛するということは隣人にたいするあらゆる義務を喜んで果すことにほかならない。しかしこのような命令でも義務にかなった行為をなすことによってこのような心術を持つこと (haben) を命ずることはできず, ただこれを努力追究すること (streben) を命じうるのみである⁽²⁾”。

かくして Philosophie における愛は実践的愛であり, philosophieren が学びえられると考えられた根拠は, 彼が人に“法則に捧げられた心術の完

成⁽³⁾”へと streben することを命じうる、と考えていたことにあるといえよう。したがって“理性のあらゆる理論的認識——それが最高善の概念にたいしても、また実践的規定根拠にたいしても役立つかぎり——にたいする愛⁽⁴⁾”によって自己の完成に至ることが、philosophieren のもっとも広義におけるカント固有の意味と考えられ、またかかる意味で学ぶことは可能であり、streben のかぎりで命ずることもできると考えられていたところに、私達はカントの教育思想の根源的なものを見てとってよいであろう。

さて以上でいちおう最広義の意味はとらえたとして、つぎにより具体的にはなにを意味しうるかを検討しよう。“理性のあらゆる理論的認識”とはそれを人間の具体的活動に即していえば、やはり“考える”とか“思索する”とか言わざるをえない。そこで私達はすでに述べた理解に立脚しつつ“考える”とのかかわりのうちにカント固有の意味をさぐってみよう。

私達はここで、“考える”ということをも“何を考えるのか”という問いと、“どう考えるのか”という問いに分けて考察してもよいであろう。いいかえれば、philosophieren が考えるという人間の機能とかかわりをもつとすれば、そこでは“考える”の実質が問題とされるのか、または形式が問題とされるのかともいえる。

私達はカントの philosophieren を“何を考えるか”への答として説明する例にヤスパースを挙げることができよう。

“philosophieren は時間の中にあっては、始めには不明瞭でしかない全体を明確化しようとするのであるが、そのためには分離を行ない、順を追って考え、そしてこうした動きの中でその当の全体を発現させねばならぬのである⁽⁵⁾”。

“問いと答えの応酬が発展してゆく過程においては、始まりとは対象ではなく道である。最初の明瞭さは問いをもって始まる。問われているものが philosophieren の意味を規定する。カントの全哲学を包括する三つな

いし四つの問題として各所に繰り返えされる有名な根本問題は次の様式で展開される⁽⁶⁾”。

philosophieren はヤスパースにあっては問いと答えのあいだで、考えることにほかならない。したがってカント哲学がかの三問ないし四問に包括されるとすれば、それらに答えるべく考えることが、とりもなおさず philosophieren なのである。ヤスパースの意図がカントその人の philosophieren の枠組を示すことにあるとすれば、三問ないし四問がそれだ、といっただけではよいかも知れない。それではカントの思想体系のなかでの、philosophieren、なかんずくカントによって学び得るものと考えられたその位置はかならずしもあきらかではない。なぜなら三問といい、四問というもその個々の問いそのものは、カントによらずとも、すでに多くの人々がそれぞれに考えたものなのであって、それらの人々と同じに考えるということでは、考えるを philosophieren におきかえる必然性は示されないからである。ちなみにカントは言葉の使用について次の格率を持っていたのである。

“ある概念に対応してただひとつの語があり、この語の意味がすでにその概念に適合していて、これと類似の概念からも区別することが非常に大切であるような場合には、かかる語を無暗に使いちらしたり、あるいはただ言いかえのためにほかの語の同意語として使用したりしないで、この語に本来特有であるところの意味を、十分気をつけて保存するがよい⁽⁶⁾”。

さて私達は第1章において三問形式と四問形式を、それぞれレベルを異にするものとして考えた。そしてこの章ですでに指摘した philosophieren の道徳性実践性の故に、philosophieren とは三問と四問をつなぐべき位置にあるものと考えてよいであろう。とすれば道徳性、実践性を形式として探究したカントの論理のコロラリー(系)として、彼における philosophieren は“何を考えるか”よりもむしろ“どう考えるか”という面から究明することがよりふさわしいであろう。

私達のこういう意図にとっては『判断力批判』(Kritik der Urteilkraft, 1790) に示されている三格率が手がかりになるであろう。その三格率とは同書第40節「共通感の一種としての趣味について」に本題の進行とはかわりないことをカント自らがことわりつつ、普通の人間悟性の格率として示されているものである。すなわち、

- “ 1. 自分自身で考えること
2. 自分自身を他者の立場において考えること
3. 常に自分自身と一致して考えること⁽⁸⁾”

である。第一の格率は成見をもたない (vorurteilsfrei) 考え方の格率、決して受動的にならない理性の格率といわれる。受動的理性への性向が成見であり、成見の最たるものが迷信(悟性が自分自身の本質的法則によって自然の根柢に規則を据えているにもかかわらず、およそ自然はかかる規則に従うものでないと思いなすこと)であり、迷信からの解放は啓蒙である。第二の格率は拡張された (erweitert) 考え方といわれる。ここで問題にされているのは認識の能力そのものではなく、その能力の合目的な使用である。それだから天分のいかににかかわらず、自己の主観的、個人的制約から脱して普遍的立場からおのれの判断に反省を加えることが、拡張された考え方と言えるのである。

第三は首尾一貫する (konsequent) 考え方の格率といわれる。カントはこの格率に達するのはもっとも困難であるという。なぜならばこのことは上のふたつの格率をふたつながらわがものにした上ではじめて達しうるものだからである。

カントは三格率をおおむねこのように説明したのちふたたび“これらの格率の第一を悟性の格率、第二を判断力の格率、第三を理性の格率”と名づけている。またこの三格率は『人間学』において

“知恵は理性の合法的に完全な実践的使用の理念であって、これを人間に要求するのはたしかに過大である。しかし、その最小の程度のものであ

ても知恵を他人が彼に注ぎ込むことはできず、人間はこれを自分自身からひき出してこなくてはならない。知恵に達するための指示はこれに導くためのみつつの格率をふくんでいる⁽⁸⁾”。

としてかけられているもの、および『論理学』において“誤謬一般を避けるための普遍的な規則と条件⁽⁹⁾”としてかけられているものと同趣旨である。

さて私達が、自己の完成に至る道、と規定した philosophieren を、理念に向けられた道徳法則との関係に着目して法則レベルでの規定とよぶとすれば、ここにとりあげた三格率は道徳法則と格率との関係、すなわち定言命法に示された格率の形式的位相規定に根拠をもつところの、philosophieren の格率レベルでの規定とよびうるであろう。

定言命法であるところの道徳法則，“君の意志の格率が、常に同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ⁽¹⁰⁾”が、格率、意志、行為という系列に従うかぎり、philosophieren も格率として表現されうるものであり、じつにそのようなものとしてこの三格率がある、と私達は考えるのである。

ところで道徳法則は意志を形式的にのみ規定するものである。とすればこの三格率において、形式と実質はいかなる関係にあるのであろうか。私達は philosophieren を形式性において追求することによって“どう考えるか”を指示する三格率に到達したのであるが、はたしてそれらは考え方の指示以外の実質的なものを含むのであろうか、含まないのであろうか。この検討を、カントが第一と第二の結合を要しもっとも困難なといった第三格率、理性の格率についておこなおう。第三格率では、自分自身と一致して (mit sich selbst einstimmig) または首尾一貫して、といわれる。ここに、自分自身の何とどう一致するのか、または首尾一貫の原理は何か、何によって首尾一貫と判定するのか、と問うことができよう。論理的整合性によってとはもはや答えられないであろう（私達は先験的弁証論をすぎ

てきたのであるから)。それでは道徳法則であろうか。これとてカントが形式的であることを主張しているかぎりでは実質的ではありえない。とすれば、首尾一貫の原理を“考える”ことの外にもとめることによってこの格率を実質化しようと試みることに、成功の見込がないようである。

一般的にいわれる格率そのものは決して実質的な内容を拒否するものではない。しかしながら、私達はこの格率を、客観的な普遍妥当性を哲学とのかかわりにおいて主張する、philosophieren の格率と考えてきた。そのような立場からはカントの純粹実践理性信仰をともしする道によって首尾一貫の原理を求めうる、と解するよりもむしろ、

“ここにおいてわれわれは、哲学が天に己れを懸けるものなく、地に己れを支えるものがないにもかかわらず、しかも確固たるべきであるといふいかにも危うい立場 (missliche Standpunkt) にあることを見るべきである⁽¹¹⁾”。

というその Philosophie をこそ philosophieren するものと解するものである。したがって自己自身との一致といわれたとき、一致さるべき自己は missliche Standpunkt (そのなかでいかなる信が成り立ちうるにもせよ) に立つもの、という形式においてしか、そのかぎりでは実質的に規定されないものとしてしか解しえないのである。

私達はこのようなカント理解に立って、私達の教育的関心の故に次のように言いうる。

もし教育というものが、他人に何かを期待し、表明することを必要とするものであるなら、philosophieren のアッピールとこの三格率こそカントその人の教育的意図の端的な表現にほかならない、と。

(完)

総 註

- (1) “ ” は引用, 『 』 は著作名を示す.
- (2) 引用部の傍点は原著のゲシュペルトを示す.
- (3) カントからの引用の訳文は三批判書については岩波文庫版篠田英雄氏訳, その他は理想社版カント全集の訳を拝借し, 一部変更をしたものもある.
- (4) 各章の註に示されるカントの引用の頁数は, 特記なきものはすべて Philosophische Bibliothek 版により PhB の略号と巻次を付す.
- (5) 本文, 註とも著者名の表示のない著書はすべてカントの著作である.

第 1 章 註

- (1) Über Pädagogik, Insel 六巻本カント全集 Band VI S. 699.
- (2) Kritik der reinen Vernunft, PhB Band 37a S. 729.
- (3) Logik, Insel 六巻本カント全集 Band III S. 448.
- (4) Kr. d. r. V. 前出 S. 753.
- (5) Anthropologie in pragmatischer Hinsicht,
Insel 六巻本カント全集 Band VI S. 339.
- (6) Ibid., S. 672.

第 2 章 註

- (1) Kritik der praktischen Vernunft, PhB Band 38 S. 123.
- (2) Kr. d. r. V., 前出 S. 32.
- (3) Kr. d. p. V., 前出 S. 17.
- (4) Kr. d. r. V., 前出 S. 32.
- (5) Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, PhB Band 41 S. 29.
- (6) Kr. d. r. V., 前出 S. 721.
- (7) Ibid., S. 726.
- (8) Ibid., S. 731.
- (9) Ibid., S. 729.
- (10) Ibid., S. 731.
- (11) Ibid., S. 732.
- (12) Ibid., S. 740.
- (13) Ibid., S. 745.
- (14) Ibid., S. 731.

- | | | | |
|------|---------------|----|---------|
| (15) | Ibid., | | S. 738. |
| (16) | Ibid., | | S. 739. |
| (17) | Kr. d. p. V., | 前出 | S. 125. |
| (18) | Kr. d. r. V., | 前出 | S. 753. |

第3章 註

- | | | | |
|------|---|----|---------|
| (1) | Kr. p. V. | 前出 | S. 125. |
| (2) | Ibid., | | S. 97. |
| (3) | Ibid., | | S. 98. |
| (4) | Ibid., | | S. 125. |
| (5) | Karl Jaspers: Plato · Augstin · Kant,
piper paperback, | | S. 301. |
| (6) | Kr. d. r. V., | 前出 | S. 349. |
| (7) | Kritik der Urteilskraft, PhB Band 39a | | S. 145. |
| (8) | Anthropologie, | 前出 | S. 112. |
| (9) | Logik, | 前出 | S. 485. |
| (10) | Kr. d. p. V., | 前出 | S. 36. |
| (11) | Grundlegung, | 前出 | S. 48. |

A Study of Kant's Educational Thought

—on his concepts of “Idee” & “philosophieren”—

Kotaro Tawaragi

Rèsumé

Through an examination of several key concepts within Kant's philosophical system, this paper outlines some of the implications which his philosophy holds for educational thought.

In the first section we try to show that the reasoning behind his approach to philosophy can best be understood in terms of the three questions which he poses in *Critique of Pure Reason*¹⁾ and the four questions which are set forth in *Logic*¹⁾. To the first set of questions he applies the term ‘scholastic conception’ (Schulbegriff), and to the second he applies the concept of ‘cosmic conception’ (Weltbegriff). He concludes that philosophy, if conceived in terms of the framework, exists only in the realm of ‘idea’.

The second section focuses on the meaning of the word ‘idea’ (Idee) as an essential concept in Kant's system of philosophy. For Kant an idea comes to have existence and meaning as a belief of an individual and becomes something which the individual expects can be realized universally through knowledge or science. Here the force which drives mankind toward realization of ‘idea’ is man's consistent effort to be guided by ‘practical reason’ which Kant emphasizes.

Among Kant's various expressions of consistent or moral effort the concept of ‘philosophize’ (philosophieren), is singled out for discussion in the third section. The word philosophy originally meant, a love for knowledge. Kant has confidence that it is possible and meaningful to exhort others to love knowledge. It is suggested that

this confidence is also the foundation for his interest in education. The three maxims²⁾ which appear in *Critique of Judgement*, *Anthropology* and *Logic* can be interpreted as his explanation of the concept of 'philosophize', and in them, we find significance from the standpoint of education.

Note:

- | | | |
|------------------------|---|--|
| 1) 1. What can I know? | [| Three questions in <i>Critique of Pure Reason</i> , Transcendental doctrine of method II, II |
| 2. What ought I to do? | | |
| 3. What may I hope? | | |
| 4. What is the man? |] | Four questions in <i>Logic</i> , Introduction III |
- 2) 1. to think by oneself
2. to think from the other's position
3. to think always in accordance with oneself

Critique of Judgement § 40